

|         |   |
|---------|---|
| 氏名      | 後藤 健志   |
| 学位の種類   | 博士（文学）  |
| 学位記番号   | 博 甲 第 8407 号  |
| 学位授与年月日 | 平成 29年 12月 31日  |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当  |
| 審査研究科   | 人文社会科学研究科   |
| 学位論文題目  | ブラジル・アマゾンにおける所有地の実体化の過程<br>—マト・グロッソ州の農地改革の諸相に関する人類学的研究— |

|    |           |         |       |
|----|-----------|---------|-------|
| 主査 | 筑波大学 教授   | Ph.D.   | 内山田 康 |
| 副査 | 筑波大学 助教   | 博士（学術）  | 木村 周平 |
| 副査 | 筑波大学 教授   | 博士（文学）  | 前川 啓治 |
| 副査 | 東京大学 名誉教授 | 修士（社会学） | 木村 秀雄 |

#### 論文の要旨

本論文はブラジル・アマゾンにおいて奥地へと移動するフロンティアの後を追って移動する土地なし運動と農地改革を研究対象とし、土地を占有して改良した後これを譲渡して更に新たな土地の占有と譲渡を繰り返しながら移動する開拓者たちのプロジェクトを追跡して、生活史のミクロな観点およびフロンティア資本主義のマクロな観点から記述し分析することを試みたメソレベルのポリティカル・エコノミー人類学の労作である。進歩的な用語を使って語られるブラジルの土地なし運動と農地改革は、果たして社会的な不平等を是正し、富のより公平な再分配を行うために実施されてきた政策なのか。土地を占有した開拓者たちが、土地の権原を獲得する以前に土地を譲渡して、さらに奥地へ向かう現象は、人類学の問題としてどのように記述できるのか。矛盾を孕んだブラジル・アマゾンの土地なし運動と農地改革は政治経済学的にどのように議論できるのか。筆者はこのような問いに導かれて、アマゾン・フロンティアにおける土地なし運動と農地改革の謎に満ちた動きを、植民地化の観点から人類学的に記述し、これを政治経済学的な観点から分析して、最後にブラジル・アマゾンの政治生態学の観点から問題の統合を試みている。

第1章「序論」では、ジョン・ロック他の所有論を参照しつつ西洋近代の私的所有権の性格について概観した後、ブラジルのアマゾン・フロンティアで行われている土地なし運動と農地改革の固有の性格を理解するために、西洋近代のそれとは異なる条件、すなわち土地の占有を通して擬制的な私的所有地が作成されている実態が示される。そしてこの事象を概念化するために「私的所有地の擬制」と「植民地化」の用語が導入される。アマゾン・フロンティアでは、土地なし運動と農地改革によって、農業と牧畜の担い手が生まれるという想定とは異なるプロセスが進行している。すなわち開拓者たちは、農地改革を通じて土地を得て、農業と畜産に従事して利潤を生み出すのではなく、占有した土地の交換価値を高めた上で商品として譲渡して利益を得る。このため、アマゾン・フロンティアにおいては「私的所有地の擬制」を通して「植民地化」が進められ、土地の

占有と占有地の譲渡が開拓者の主要な経済活動となっていること、またこれを推進する土地なし運動と農地改革の役割が民族誌の記述を通して提示されることが予示される。

第2章「アマゾン・フロンティアの形成」では、アマゾンで進行する土地獲得を可能としている植民地化と農地改革の関係のコンテキスト、すなわちその政治的・制度的な背景が歴史的に論述される。農地改革を通してアマゾン植民地化が推進される制度が確立したのは軍事体制期であったことが示され、アマゾン・フロンティアの植民地化を法的・制度的に可能にしている国家による植民地化政策、植民地化を推進する INCRA（国立植民農地改革院）を始めとする行政機関、土地の占有を可能にする法制度、占有された土地に正当性を与える登記のシステムについて記述される。また、民族誌的な3章から6章において記述の中心となる土地なし運動を展開する MST、受益者集団 FETAGRI、小規模生産者たちと生産組合、土地を占有するポセイロ（占有者）、グリエイロ（詐欺的な手法で土地から利益を上げる者）などの主要なアクターとその背景が記述される。

第3章「キャンプにおける所有地の作成」では、キャンプ・ブリチの事例を通して、農地改革が失敗したにも拘わらず、ポセイロたちは占拠したキャンプの土地を譲渡して利潤を得る過程を記述して、土地の占有の目的が土地の売買であることを明らかにする。公有地となったファゼンダの跡地にキャンプを作ったポセイロたちは、INCRA の農地改革を通じて農地を獲得するために、キャンプ・ブリチで土地なし運動に参加していた。バラックが建てられたキャンプにはインフラが整備されて徐々に都市化する一方、INCRA は用地取得に失敗する。ポセイロたちは地価が上昇したキャンプの小区画を売って別の土地に移って行き、キャンプは消滅する。キャンプの誕生から消滅までの記述を通して、急進的な MST と穏健な FETAGRI の異なるゴール、農地改革の成否に関わらず土地の占有と譲渡を繰り返して利潤を得るポセイロの経済活動の性質が明らかにされる。

第4章「非公式な入植地における所有地の作成」では、非公式な入植地でポセイロたちが主体的に進める、占拠した土地の正規化、くり返し行われる土地の売買、遷移を前提としたポセイロの生活過程が、複数のポセイロの生活史を通して明らかにされる。筆者が取り上げるのは森林が枯渇した後、大豆プランテーションに変容した大平原の奥に位置するアウロ・ベルヂとマデイランヂアという二つの非公式な入植地である。ここでは「土地なし」と「ポセイロ」は区別されている。前者が INCRA の農地改革の受動的な受益者であるのに対して、後者は能動的な土地の占有者であり積極的に生産活動に従事する。彼らは他所に持っていた土地を売って移り住んできており、この地に一定期間留まって生産活動に従事しながらも土地を売って資本を蓄積し、新たな土地に移動してゆく。こうした私的所有地の擬制に向けた主体的な活動と、これと一体となった土地の売買と移動を繰り返す不断の遷移が、フロンティアの開墾地を広げるダイナミズムであることが示される。

第5章「入植地における所有地の編成と編入」では、INCRA が公式に設立した入植地カルロス・プレスチスにおいて土地の使用許可証を与えられた入植者たちが、農地の権原を得る以前に、土地の使用許可証を譲渡する仕方を取引する様態を記述した後、対立する MST と FETAGRI の2派の中間集団と入植者たちの関係を記述して、両者の異なるゴールが明らかにされる。植民者たちは初めから MST 系と FETAGRI 系に分裂しているのではない。農地の分配を求めて MST に参加していた入植者たちが土地を獲得すると土地なし運動から離脱して、FETAGRI 系の生産組合に参加している。資本主義と戦う MST は土地の私的所有権を認めていないため、私的所有地の擬制という目的を持たない者だけが前者と友好的な関係を保っている。入植地に土地を得た後、土地なしは土地を売って他所へ去り、小規模生産者はより長期に渡って土地を保有し、カルロス・プレスチスでは入植者たちから依頼を受けて大豆を耕作する耕作者が現れた。彼らは農地の持ち主の取り分だけでなく MST にも貢納を徴取されている。最後に MST の運動が社会改革の運動としては機能しない矛盾が明らかにされる。

第6章「入植地の発展経路」では、入植が開始されてから25年が経過したノヴァ・クプアスーの事例を通

して、ノルタウン各地のキャンプ（第3章）、非公式な入植地（第4章）、公式な入植地（第5章）で記述した異なる状況が、当事者たちの視点に立つと、それぞれ起こるべくして起こった事象であったことが議論される。社会運動の観点からは見えない土地なしのキャンプの発展の軌道が当事者には見えている。キャンプは、アグロヴィラとして発展して都市化してゆくことが想定されている。森林が食い潰された後、作物が耕作され、地力が落ちると放牧が行われる。入植者たちにとってこれはどこかで見たことのあるサイクルなのである。入植者たちは占有した土地が、どのような発展の軌道を辿ってゆくのか想定した上で、その時々が必要とされている行為を適用して、これを正当化していることが論じられる。

第7章「結論」では、フロンティア資本主義の展開の中に「土地なし」と「小規模生産者」を位置づけて、土地なし運動による土地の占有は、私的所有地の擬制を経て恒久的な所有権が達成される性質のものではないこと、またフロンティアにおける所有地は、一時的に利用された後で譲渡されることを前提にして、開拓者たちは複数の地点の間を絶えず移動すると結論づけられる。開拓者たちによるこのような活動は、差異を見出してそこから利潤を抽出する資本主義的な営みの一形態であり、これはフロンティアを追い続けて差異を利潤に変えるフロンティア資本主義の営みである。最後にこのダイナミズムの基盤であるアマゾンの生態環境に言及して、ポリティカル・エコノミー論的に議論してきたアマゾン・フロンティアの土地なし運動と農地改革は、ポリティカル・エコロジーの問題として統合しうると結論される。

## 審査の要旨

### 1 批評

本論文は、移動するブラジルのアマゾン・フロンティアを追いかけるようにして展開される土地なし運動と、それに続く農地改革がまさに起こりつつある場所において、移動する開拓者を数千キロに及ぶ範囲で追いかけて関連する出来事を記述し、想定とは異なるその実態を明らかにした上で、ポリティカル・エコノミーの概念を使ってこの過程について考察したメソレベルの人類学的研究の力作である。社会改革的な土地なし運動の結果、土地は譲渡可能な商品となり、土地なしは土地を売ってさらに奥地に移動して行き、一方、小規模生産者たちは獲得した土地で生産活動に従事するが、より良い条件を求めて土地を譲渡して移動して行く過程が民族誌的事例を通して、時間空間的な展開を記述した上で概念化している。一見して対立するように見えた社会改革的な土地なし運動と土地の私的所有は、私的所有地の擬制と移動を続ける植民地化においては矛盾しないことが明らかにされ、また性向が異なると見えた土地なしと小規模生産者がフロンティア資本主義の発展過程の観点から見たとき同様の役割を担っていることが明らかにされる。著者は移動を続けるアマゾン・フロンティアの広い地域を3年間に渡って移動しながら調査して、ミクロな民族誌的な事例の記述とマクロな政治経済学的な分析を統合してこの矛盾がフロンティア資本主義の動的メカニズムの一部であることを明らかにした。この研究はアマゾン研究に新たな地平を切り開くことに成功している。

### 2 最終試験

平成29年10月23日、人文社会科学研究所学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

### 3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。